

奈良県御所市

中 西 遺 跡

— 第7次発掘調査報告 —

平成17年(2005年)1月

御所市教育委員会

例　言

1. 本書は、工場増築工事に伴う事前調査として、昭和アルミパウダー株式会社の委託を受けて御所市教育委員会が実施した、御所市室408・413・402-1の各一部に所在する中西遺跡第7次調査地の発掘調査報告書である。
2. 現地調査は、平成15年8月4日に開始、同年9月5日に終了した。
3. 調査は、御所市教育委員会　技術職員　木許　守が担当し、調査補助員として濱　慎一（関西大学大学院生）が参加した。作業員の派遣は、安西工業株式会社が担当した。また、現地調査および整理作業を通じて、藤田和尊（御所市教育委員会）の協力があった。
4. 本書の作成にかかる整理作業には、藤村藤子・尾上昌子・榎原静代・中久美子・森香奈子が参加した。
5. 本書の執筆・編集は木許が行った。
6. 掘図の製図は、藤村が遺物を担当し、その他を木許が行った。また写真撮影は遺構・遺物とも木許が行った。
8. 引用・参考文献は、本文末尾に一括して掲げた。
9. 本書で用いた「北」は「磁北」である。
10. 現地調査および本書刊行にかかる費用は、昭和アルミパウダー株式会社がすべて負担した。関係各位にご理解・ご協力をいただいたことを記し、深謝します。

本文目次

例言

1. 位置と既往の調査	1
2. 調査の契機と経過	4
3. 調査の成果	5
1. 調査地の基本層序	5
2. 遺構	9
3. 出土遺物	13
4.まとめ	27
参考文献	28

挿図目次

図1 中西遺跡周辺の遺跡分布 (1/50,000)
図2 中西遺跡 調査地と周辺地形 (1/5,000)
図3 調査区の配置 (S=1/1,000)
図4 調査区 土層断面図1 (S=1/100)
図5 調査区 土層断面図2 (S=1/100)
図6 1区の遺構 (S=1/100)
図7 土坑1 平面・断面図 (S=1/40)
図8 溝1～4 断面図 (S=1/40)
図9 溝5 平面・断面図
図10 土坑1 出土遺物1 (S=1/3)
図11 土坑1 出土遺物2 (S=1/3)
図12 土坑1 出土遺物3 (S=1/3)
図13 1区・2区包含層 出土遺物 (S=1/3)
図14 3区包含層 出土遺物 (S=1/3)

1. 位置と既往の調査

中西遺跡は、御所市大字室に所在し、御所市域のほぼ中央に位置して、標高105～110m前後の平地部に立地している。図1に見えるように、遺跡の南は巨勢山丘陵が迫り北方向に眺望が開けている。周辺には弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が多く点在している。

鴨都波遺跡は、従前から弥生時代の大集落として著名であったが、その始まりについては、最近の調査（2003年2～3月、樋考古調査）で縄文時代晩期の遺物包含層が確認されており、その時点にまで遡る可能性も考えられるようになっている。また、古墳時代への継続は、住居跡などをはじめとする古墳時代の遺構の存在が知られており、近年は、豊富な副葬品を出土した鴨都波1号墳（藤田・木許2001）が検出されたほか、近辺で木棺墓や土坑、溝、ピットなど各種の遺構の存在が判明した。これらの成果から、各時期間での連続性について慎重な検討が必要ではあるが、鴨都波遺跡の、比較的長期間にわたって存続した集落としての姿が浮かび上がりつつある。

葛城川の左岸に当たる葛城山・金剛山の山麓部には、この鴨都波遺跡のほかにも、古墳時代の集落が多く営まれている。鴨都波遺跡から南に辿ればまず樋原遺跡がある。古墳時代前期の溝や土坑などが検出され、布留式土器の一括資料が得られている（藤田1994）。



図1 中西遺跡周辺の遺跡分布 (S.=1/50,000)

森脇遺跡は発掘調査による全体像の掌握には至っていないが、御所市教育委員会が実施した小規模な立ち会い調査（1990年1月）とトレンチ調査（1996年1月）の所見によれば、古墳時代後期の遺物包含層が存在することは確実である。地山をベースとする土坑などもみられており、当該期の集落であった可能性が高い。

その南数百mに位置する名柄遺跡は、中期後葉から後期前葉にかけての豪族の居館跡と考えられる遺構が検出された（藤田1991）ことでも著名である。また、居館遺構の北側にあたる遺跡の北辺部で行った発掘調査（木許1995）では、ピット群や溝などの遺構も検出されている。ピットの形成時期は不詳ながら、上面を覆っていた包含層出土の土器は布留式の前半期を主体とするようで、居館遺構より先行する集落の存在を予想させるものであった。

名柄遺跡や森脇遺跡の実態を窺うための資料は現状ではあまりに乏しい。しかし、名柄遺跡はその内に豪族居館を含むとみられる点で特異であるものの、周囲にはそれと同時期もしくは先行する時期の集落の広がりが想定できる。森脇遺跡の性格についてはなおさら不明であるが、やはり古墳時代の集落跡とすれば、近接するこの2遺跡が、現状では時期的に継続しているようにみえる点は興味深い。より新しい時期の森脇遺跡に名柄遺跡と同様の遺構が存在する可能性も全くないとはいえないだろう。

さて、このような森脇・名柄遺跡のさらに南には、中期中葉以降の遺跡として、広域の空間に住居・生産・祭祀の要素が散在する南郷遺跡群（坂編1996ほか）が広がっている。

このように、南葛城地域の葛城山・金剛山の山麓部には、同じ古墳時代でも、やや形成時期を違え、同時期の場合には互いに性格の異なる集落が営まれていたとみられる。

本書で報告する中西遺跡は、後述するように過去の発掘調査成果から、弥生時代・古墳時代の集落跡であることが知られている。古墳時代の集落である点に関しては、上記の各遺跡と並行する時期があるが、本遺跡が葛城川の右岸に所在することが異なっている。このことは、本遺跡に南接して室宮山古墳（秋山・網干1959・木許編1996ほか）が存在していることと関連するのかもしれない。つまり、中西遺跡の集落は、このような室宮山古墳との位置関係から、古墳の築造に関わって営まれた時期があるとも考えられている。

室宮山古墳は、中期前葉に築造された、墳丘の全長238mの威容を誇る前方後円墳である。御所市域における前期古墳は、鴨都波1号墳が知られるほか数基の古墳が存在する。しかし、いずれも墳丘規模をみれば室宮山古墳に比べて著しく小規模である。したがって、単純にここに系譜関係を想定することが難しい状況で、当該地域に点在する前期古墳と中期前葉の室宮山古墳の関係はなお様々な観点から検討すべき課題を含んでいる。また、この室宮山古墳の背後の丘陵には、700基以上の古墳で構成されるとみられる巨勢山古墳群が存在している。中西遺跡の動向は、この巨勢山古墳群とも無関係とは思えない。

次に、中西遺跡の既往の調査を概観しておこう。図2に従前の調査地を示した。

第1次調査（関川 1989）は、国道309号線の歩道増設工事に伴って行われた発掘調査である。室宮山古墳の北側周堤に当たる地点を中心に8箇所のトレンチが設定された。これらのトレンチによってまず調査地周辺の旧地形が明らかにされた。室宮山古墳の北側周堤部分は、南から延びる3本の尾根地形とそれに挟まれる谷地形からなっており、周堤そのものは谷地形を地山掘削土で埋め立てて築堤するという大規模なものであったことが判明した。また、周堤下で検出された遺構やトレンチの包含層出土遺物の検討から、「從来からの通常集落が室大墓古墳の造営に伴って規模を広げて造営集落に転化し、その一部が外堤の造営によって廃棄され、埋没した」と考えられた。

第2次調査（木許 1990）は、室宮山古墳の陪冢、ネコ塚古墳に北接する地点で、墓地造成工事に伴って実施した。小規模なトレンチ調査ではあったが、弥生時代と古墳時代の各々の遺構が検出された。弥生時代のそれは、溝状遺構2条であったが、そのうち、溝2と称した溝の埋土からは、畿内第I様式新段階（佐原 1968）にあたる土器が出土した。また、古墳時代の遺構は自然河道で、布留3式（寺沢 1986）に併行するとみられる土師器が出土した。

第3次調査（木許 1991）は、個人住宅の建築に先立つ発掘調査として実施した。検出した遺構は、竪穴住居・土坑・ピットなどである。このうち竪穴住居からは布留3式に並行するとみられる土師器が出土した。

第4次（小栗 2002）、第5次調査（小栗 2003）は、国道309号線の歩道整備工事に伴って実施



図2 中西遺跡 調査地と周辺地形 (S.=1/5,000)

された。遺構は古墳時代中期の土坑、柱穴などが検出されている。

第6次調査（2002年11月、御所市教委調査）・第8次調査（2003年12月、御所市教委調査）は、市道の道路改良工事（水路改修）に伴って実施したものである。ただし、第8次調査地は工事による掘削が浅く、現耕作床土内に収まることを確認したにとどまった。第6次調査地でも各種制約があつて実際に設定できた調査区の面積は狭小で不分明な点も多い。それでも第6次調査地の北端に設定した調査区では、素堀溝・井戸・流路・ピットなどの遺構が検出され、包含層からの出土遺物も認められた。出土土器の大半は弥生土器と古墳時代の土師器であったが、検出された遺構がベースとする土層には奈良時代や平安時代に下る土器も含まれている。したがつて遺構形成時期も少なくともその時点まで下ることになる。第6・8次調査地はいずれにしても工事掘削の深さに合わせた調査を実施したもので、地山の検出には至っていない。この地点での古墳時代以前の遺構は、さらに地中深くに埋没していると考えられた。

以上のほか、調査次数には数えていないが、図2に示した地点でトレンチ調査や立会調査を実施している。いずれも個人住宅建築に関わるもので、浄化槽部分や木造建築の基礎工事などのごく小規模なものである。いずれも遺構の検出などはみていない。

2. 調査の契機と経過

平成15年5月、御所市室所在の昭和アルミパウダー株式会社から、同社に隣接する室408・413・402-1の各一部において、工場増築を目的とする発掘届けが提出された。同地は、中西遺跡の範囲内に当たるので、当市教育委員会はこの届出を奈良県教育委員会に進達する一方、事業者との間で遺跡の保護、発掘調査の方法を巡って協議を重ねた。

結果的には、工事による掘削を最小限にとどめ発掘調査はその範囲内とすること、ただし部分的に下層の状態を確認するトレンチを設定する場合のあること、発掘調査および整理事業・報告書刊行にかかる費用は事業者の負担とすることなどで合意した。当市教育委員会は、このような協議結果を受けて事業者との間に発掘調査の受託契約を締結し、発掘調査通知の提出など、各種の手続きを行つて、担当者の配置などを含む部的な発掘調査の体制を整えた。

発掘調査は平成15年8月4日に着手し、同年9月5日に終了した。その間の実働日数は22日間である。

調査区は、建築予定建物の基礎工事箇所や油水分離層設置箇所の掘削にあわせて設定した。それらを西から1区～4区と呼称し、3区は3-W区と3-E区に分けた。また、これらのトレンチの多くは、工事による掘削の深さが現地表面から1mにとどまるため、発掘調査もこの深さまでとどめた。また各調査区で遺物包含層を確認したものの、下層の状況が必ずしも明らかではなかったので、発掘調査時の残土置き場や建築工事後に影響のない地点を選んで、第5区として地山面を検出するトレンチを設定した。敷地内における調査区の配置は、図3に示したとおりである。

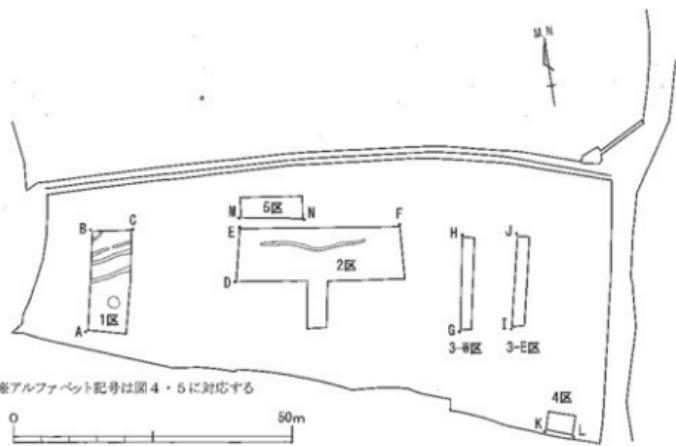


図3 調査区の配置 (S.=1/1,000)

調査による掘削は、重機を用いて行い、包含層を除去しつつ遺構面に近づいたところで人力掘削に切り替えた。遺構面を検出後は精査して各遺構の検出に努めたが、結果的には本書で報告するところ、きわめて密度が低い状態でしか遺構は存在しなかった。なお、1区・2区で遺構を検出したが、この面のレベルは、設計・計画された掘削の深さとほぼ同様の高さであった。

各種図面の作成及び調査区各所の写真撮影を終えたのち、調査最終段階で、現地で関係者に対し、調査成果の説明会を行って、現地調査を終了した。

3. 調査の成果

1. 調査地の基本層序

①1区

1区は、調査地の西端に設定したトレンチである。南北18m、東西7mの126m²の調査区を設定した。基本層序は、1層 耕土(厚約20cm)・2層 床土(厚約20cm)の下に、3層 暗灰色砂礫の堆積が認められた。この3層は、比較的遺物密度の高い包含層であり、図4・5に示したとおり、今次調査地全体に認められた。3層の厚みは地点によって異なるが、40~50cmほどが平均的であった。遺物の所属時期は、後述するように、古墳時代中期前半ころのものが主体になるようであるが、後期の須恵器のほか、弥生土器や古代・中世の土器なども散見できる状況である。

この3層下は、灰色系統の粗砂・細砂・砂質土などが幾重にも堆積している状態であった。それらは、3層ほどには遺物の密度が低くないものの、やはり遺物包含層である。遺物は、3層と同様に古墳時代の比率が高いが、その前後の比較的長期間にわたる時期のものが含まれている。

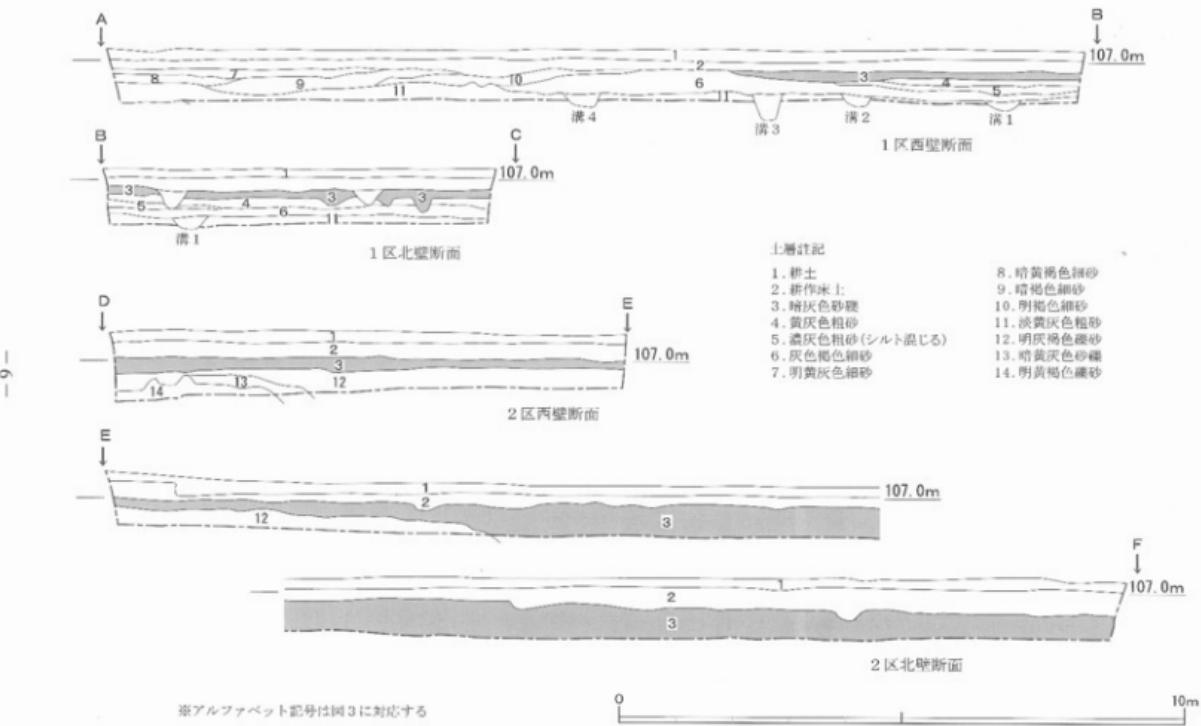
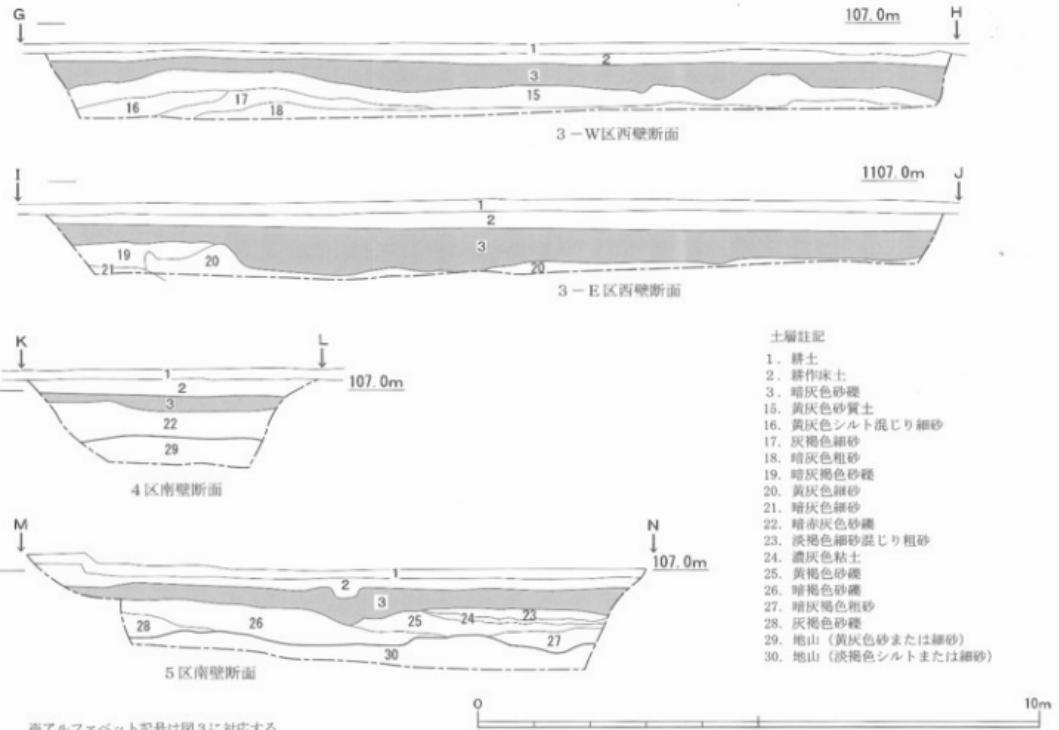


図4 調査区 土層断面図1 ($S=1/100$)



※アルファベット記号は図3に対応する

図5 調査区 土層断面図2 (S.=1/100)

遺構は、これらの砂層などの下層で検出した。遺構の内容は後述するとおりで、土坑・溝が検出されたが、その密度は低く散在的な様相である。

遺構のベースとなる土層は、図4-11層の淡黄灰色粗砂であるが、この11層はいわゆる地山ではない。前述したように、工事による掘削がこれ以上の深さに至らないために、ここではこの遺構面下の地山の検出などは行っていない。

②2区

2区は、調査地のほぼ中央に設定したトレンチである。当初南北10m、東西30mのトレンチを設定し、この南辺の中央に幅3.5m、長さ8mの拡張区を設けて、全体的な遺構の存否および層序の確認に努めた。調査区の面積は、合計330m²になった。基本層序は1区のそれと同様である。やはり3層として、遺物包含層が認められた。しかし、遺構については、工事による掘削の深さの範囲では素掘りの溝が1条存在したのみである。1区では数条が平行している状態であったのに対して、周辺の精査を繰り返したが、これのみが単独で存在する状況であった。遺構のベースとなる土層は、3層直下に存在した褐色系の疊砂などで、やはり、これは地山ではない。1区と同様に、ここでも地山の検出は行っていない。

③3区

3区として設定した地点に計画された建物は、全面的な布堀りによる基礎工事ではなく、工事による掘削は建物の東西の2辺にのみ行われる予定である。発掘調査の調査区はこれにあわせて、2本のトレンチとした。それぞれを3-W区、3-E区とした。

それぞれ幅2.5m、長さ16mの調査区を設定した。調査区の合計面積は80m²である。

基本層序は、1・2区と同様に、1層・2層下に、遺物包含層である3層が認められた。3層下には砂層などが堆積する状況も、1・2区と同様である。しかし、予定されている工事による掘削の深さまでには、遺構は存在しなかった。

④4区

4区は、調査地の南東隅部に位置する。油水分離水槽の設置が計画された地点に設定したものである。他の調査区については深さ1mで調査の深さも止めたが、当該地は工事による予定掘削の深さが2mに及ぶので、調査対象もその深さまでとした。ただ、面積自体がさほど広くなく、南北2m、東西3mほどの小さなものであり、面的な検出による成果があまり期待されないので、ここでは、下層における遺構の存否など、その状況をできる限り把握することに努めた。

4区の基本層序は、他の調査区と同様であるが、1層 耕土・2層 床土の下層にあった遺物包含層である3層の暗灰色砂疊は、ここでは厚さ30cm程と薄くなり、その下層にやはり遺物包含層である4層の暗赤灰色砂疊の堆積が見られた。4層は50cm程の厚みがあったが、遺物の密度はあまり高くなかった。遺物量のこのような状況も他の調査区と同様である。

4層下は、黄灰色粗砂ないし細砂で、約50cm程の厚みを検出したが、その間に遺物の出土はなく、

下層に向けて変化の兆候も見られなかつたので、作業の安全性を考えてここで掘削を止めた。調査区周辺では、この黄灰色粗砂ないし細砂が地山になると考へられる。

4区の調査による掘削の深さは1.7mであるが、地山上面にも遺構は存在しなかつた。

⑤5区

1～4区までの各調査区では、予定された工事による掘削が現地表から1mの深さに止まる地点が大部分であったので、発掘調査もそれに合わせた深さを設定した。

そこで、より下層の状況を把握しておく必要があると考えられたので、建物建築後の基礎に影響のない地点で、5区として確認トレンチを設定した。具体的には、調査地内の残土置き場や借地を避けるなどの条件を勘案し、1区に北接する地点で幅4m、長さ11mのトレンチが設定できた。

基本的な層序は、1層 耕土、2層 床土、3層 暗灰色砂礫（遺物包含層）であることは、他の調査区と同様である。3層下には、淡褐色細砂・濃灰色粘土・暗褐色砂礫・暗灰色粗砂などが堆積し、地山に至る。3層下から地山までの各層のなかには、古墳時代の遺物を含むものもあるが、その密度は低い。地山は淡褐色シルトないし細砂である。

現地表から地山までの深さは、1.4～1.5m程で、地山上にも遺構は認められなかつた。

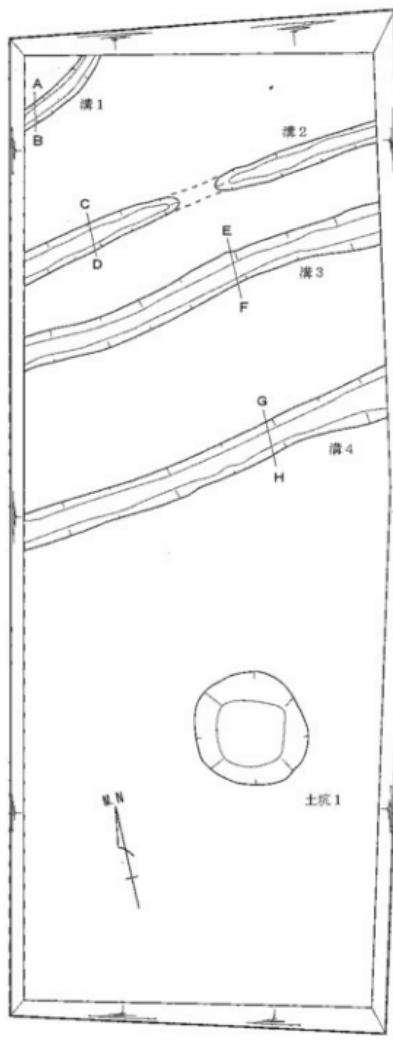
2. 遺構

遺構は、1区および2区で検出した。図6・図9に示したように、1区では土坑1基と溝4条が、2区では溝1条が検出されたのみである。1区や2区では、遺構が造られていた面そのものは、基本的にそれぞれの調査区の全体において検出し、その上面で精査を繰り返したが、実際に検出された遺構密度は低いものであった。ここでの遺構のあり方は散在的な様相である。以下に各遺構について詳述する。

①土坑1（図6・7）

土坑1は1区の南半で検出した。平面形は径2.0～2.1mの不整形な円形で、下端の形状は隅丸方形を呈する。検出深さは43cmを測る。

埋土は、シルト混じり細砂なども含むものの、多くは2層とした暗灰色粘土である。2層には、図7の遺構断面図や図版2に示したように、人頭大からそれよりもやや小振な花崗岩礫を多く含んでいた。また後述する瓦器椀・瓦器皿・土師器皿など、多くの遺物がこの2層から出土した。これらの土器類は、接合復元しても完形になるものは少なく、瓦器椀（10-8）・瓦器皿（12-25）・土師器皿（12-27・31・38・39）が完形もしくは口縁部などのごく一部を欠いているものであるほかは、ほとんどが破片になっていた。その数は、図10・11に示したもののはか図化できなかつたものを含めて、瓦器椀は底部の数を数えると42個体以上があつた。また、皿の口縁部や土釜の鉢部などで数えると、瓦器皿は3個体以上、土師器皿は28個体以上、土師器土釜は3個体以上を識別することができる。



※アルファベット記号は図8に対応する



図6 1区の遺構 (S.=1/100)

土坑1は、出土遺物の面から見れば、規模の割に出土土器類の数が多く、しかもそれらのほとんどが破片になっていて完形近くに復元することができないという特徴がある。これらの土器は、11世紀後葉から12世紀前葉頃のものとみられるので、土坑1の形成時期も当該期と考えられる。

②溝1～4 (図6・図8)

溝1～4は、1区の北半部で検出した。遺構のベースとなる土層はいずれも図4-11層である。

溝1は、調査区の北西隅部で検出したもので、調査区内ではわずかに長さ2m弱が存在しただけなので、溝の全体の方向などもやや判りにくい。幅70cm、深さ16cmを測る。埋土は黄灰色粗砂である。

溝2～4は、おおよそ調査区を横断するような状態で東西方向にそれぞれ長さ7m程が検出された。この3条の溝は、互いに平行しているが、溝1と溝2の間隔が約1m、溝2と溝3の間隔が2.4m空いており、等間隔とはなっていない。また、遺構の幅は50～70cmではほぼ同様であるが、深さについては、溝2が12cm、溝4が14cm前後であったのに対して、溝3のみが35cm程度あってやや深く、断面形態も逆台形で異なる。溝2は検出部のはば中央でとぎれているが、本来は繋がっていたと思われる。検出した遺構の深さが10数cmと浅いものであることからみても、本来の遺構の上半は相当の削平を受けていると考えられる。埋土は、溝2が明灰色砂礫、溝3が明灰色粗砂、溝4が明黄灰色砂礫である。これらの埋土は、色調の多少の

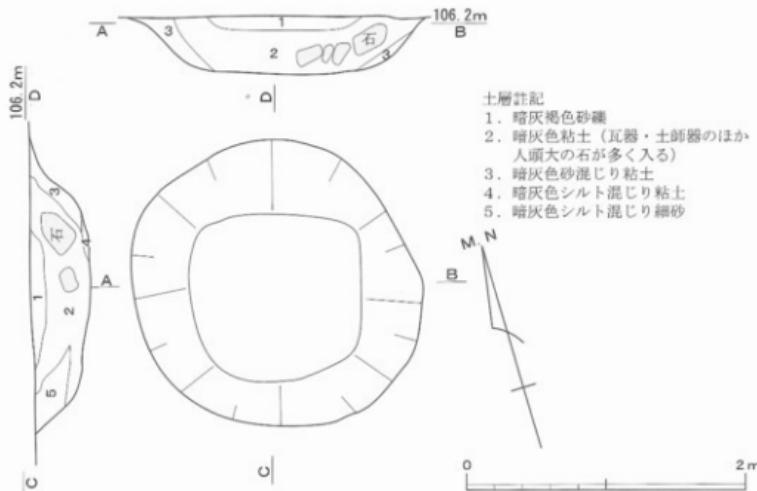


図7 土坑1 平面・断面図 (S.=1/40)

違いがあるが、粗砂やそれよりもやや粒子が粗い砾である点で共通している。

このように、溝2～3は、遺構の深さが多少異なっているが、平行して存在している平面的なあり方や、埋土の状態からすれば、同時に形成されたと考えられよう。ただし、溝1も含めて埋土中からの遺物の出土はなかったので、形成時期の特定は困難である。

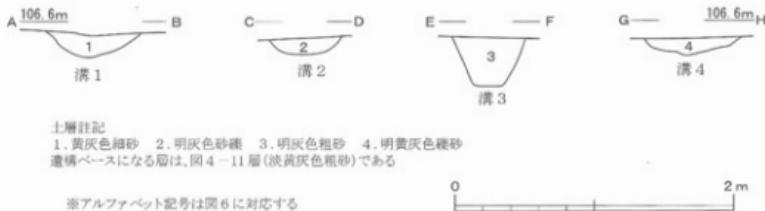


図8 溝1～4 断面図 (S.=1/40)

③溝5 (図9)

溝5は2区のほぼ中央部で、遺物包含層である図4-3層下に検出した。2区ではこれ以外の遺構がなく、単独で存在していた。溝5は長さ約9.5m、幅25～30cm、深さ19cmを測る。埋土は、暗褐色砂砾である。

図3に調査地全体の調査区の配置とともに遺構配置をやや模式的に示したが、1区の溝2～4が

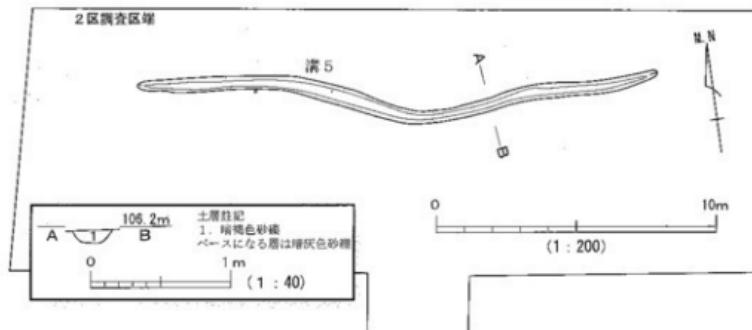


図9 溝5 平面・断面図

直線的に平行して伸びていることから見ると、溝5がこのいずれかに繋がっていたとも断定できない状態である。埋土は、砂礫である点では1区の溝と共通するが、色調が、1区の溝がいずれも明灰色系であるのに対し、暗褐色を呈している点で異なっている。

これらの点から、溝5は、1区で検出したいずれかの溝と繋がるものではなく、その性格もやや異なっていたと思われる。

④検出遺構のまとめ

本次調査地では、土坑1基・溝5条が検出された。全体に遺構がまばらでまとまりがないこともあって、個々の性格を考えることは難しい。

1区の北半で検出したような平行して数条が掘られる素掘溝は、畠作などの耕作に関わる遺構と考えられている。調査地全体に住居址や柱穴が全く認められないことから、この地点が当時の集落のなかでも居住域とは考えにくい。田畠などがあった生産域とし、各遺構の深い部分だけが残っていて検出されたとすれば、これらの溝の解釈も可能かと思われる。ただ、3条の平行する溝のうち、やや深さのある溝3や、2区の溝5は、他の溝より深いことなどから、それらとは性格が異なる可能性がある。例えば、畠地の区画のためなどの溝と考えられようか。

また、土坑1についてもその機能を考えることは難しい。検出された層位からみて土坑1がこれらの溝と同時期のものとすれば、土坑1に人頭大程度の石が多く入れられていたことからは、例えば、耕作地の維持管理のための小規模な整地などを行った際に邪魔になった石を整理する目的で掘られたものなどと考えられる。また、土坑1の埋土が粘土を主体にしていることから、それが一気に埋没したのではなく、泥土を溜めつづく比較的長い期間、壅んだ状態になっていたと考えられる。その間にこの土坑がゴミ捨て場として利用され、不要になった土器などがここに捨てられたのであろうか。

3. 出土遺物

今次調査で出土した遺物は、瓦器や土器が中心で、コンテナにして5箱分程があった。そのうち図化可能であったものを図10～14に掲げた。以下に図に従いながら個別に説明を進めるが、瓦器・土師器皿などの型式分類等については松本洋明氏編『十六面・薬王寺遺跡』（松本編1988）に、古式土師器の形式分類等については寺沢薰氏編『矢部遺跡』（寺沢編1986）に、須恵器型式分類は田辺昭三氏『陶邑古窯址I』（田辺1966）に、円筒埴輪の年代観等については川西宏幸『円筒埴輪総論』（川西1978）に、それぞれ従った。

①土坑1出土遺物（図10～12）

土坑1から出土した遺物の総数は前節に記したとおりである。それらのうち、図化可能であったものを図10～12に示した。

（10-1）～（12-14）は、瓦器椀である。内外面の調整が一定程度以上判るものを見ると、いずれも内面は比較的密にヘラミガキ調整を行っているが、外面のヘラミガキは、かなり粗く透き間が目立っている。

各部の形態については、口縁部の形状が判るものは（10-1）～（11-14）までの14個体、高台の形状が判るものは（10-1）～（11-11）および（11-15）～（12-24）の21個体がある。

（10-1）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は16.0cm、器高は6.2cmを測る。（10-2）は口縁部の約1/2が残存していた。復原口径は15.8cm、器高は6.4cmを測る。（10-3）は口縁部の約1/2が残存していた。復原口径は14.8cm、器高は6.2cmを測る。外面の炭素の吸着が悪く、白灰色の部分がまだらに残っている。（10-4）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は15.0cm、器高は6.8cmを測る。（10-5）は口縁部の約1/3が残存していた。復原口径は15.0cm、器高は6.1cmを測る。（10-6）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は15.6cm、器高は5.5cmを測る。（10-7）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は14.8cm、器高は5.6cmを測る。（10-8）は口縁部のごく一部を欠くがほぼ完形である。口径は14.8cm、器高は5.9cmを測る。（11-9）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は16.0cm、器高は6.0cmを測る。（11-10）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は15.0cm、器高は6.1cmを測る。（11-11）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は15.2cm、器高は6.3cmを測る。（11-12）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は16.0cm、残存高5.3cmを測る。（11-13）は口縁部の約1/3が残存していた。復原口径は15.6cm、残存高4.6cmを測る。（11-14）は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は14.4cm、残存高5.0cmを測る。

口縁部の形状は、口縁部の内面に1条の比較的浅い沈線を施した椀口縁Cが多いが、（10-5）は口縁端部に沈線を施した椀口縁D、（10-6）・（10-7）は口縁端部に沈線を施し、端部を意識的に外反状に仕上げた椀口縁Eである。

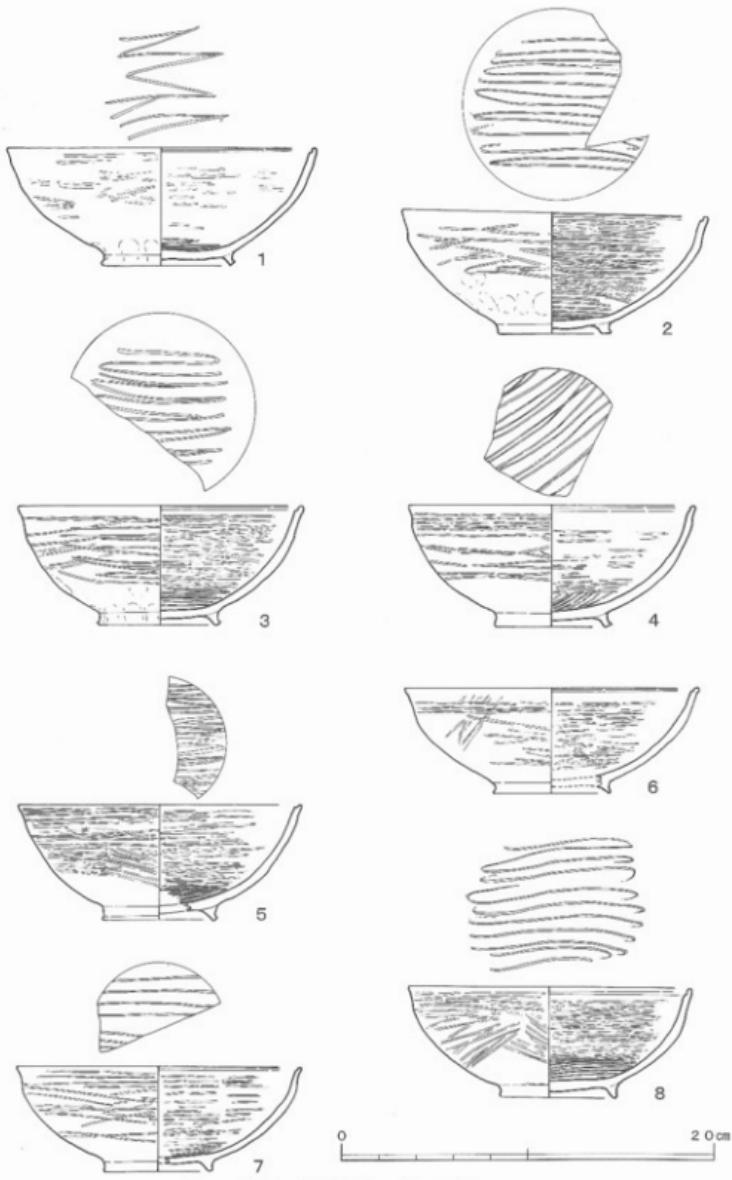


図10 土坑1 出土遺物1 (S.=1/3)

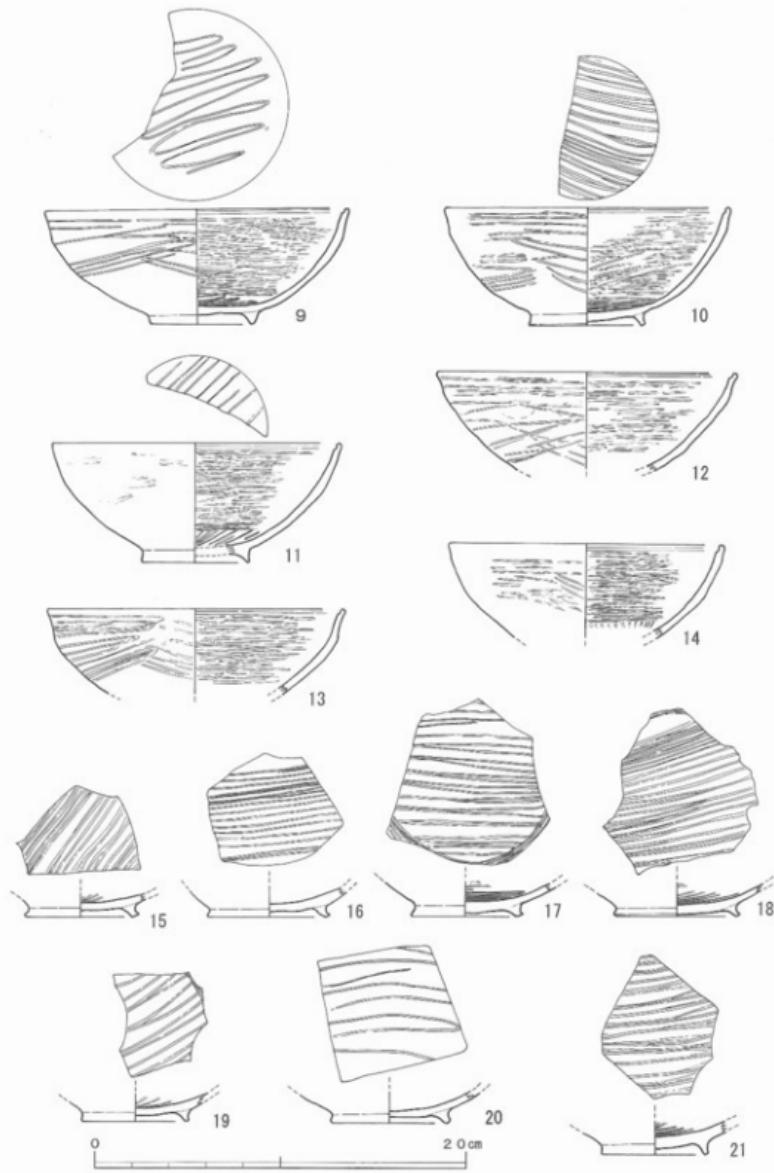


图11 土坑1 出土遗物2 (S.=1/3)

高台に関しては、上に列記したもののほか、(11-15)～(12-24)で、その形状を知ることができる。外湾状に開いた高台Bが多数を占めている。しかし、(11-11)は高台の断面形が細長い逆三角形の高台Cで、(10-8)・(11-9)・(11-19)・(11-21)・(12-24)の高台は外湾状に開かないで、断面形があまり細長くはないが逆三角形を呈しており高台Cに近い。また、(12-23)は外傾状に張り付けた厚みのある高台で高台Aに相当するとみられる。

底部内面(見込み)の暗文は、平行線暗文を主体にするが、(12-22)・(12-23)・(12-24)は格子状暗文になっている。この底部内面の暗文や先の高台の断面形態は出土瓦器柵の時期比定の目安になるが、土坑1で検出された底部内面に格子状暗文が施される3個体の瓦器柵は、その高台の断面形態がそれぞれ高台B・高台Aに近いもの・高台Cに近いものになっており、ヴァラエティに富んでいる。

次に(12-25)・(12-26)は、瓦器皿である。(12-25)は口縁端部のごく一部を欠いているがほぼ完形である。口径は10.3cm、器高は2.8cmを測る。丸底状の底部から緩やかに屈曲して繋がる口縁部は、外上方に直線的にのびている。端部はヨコナデによって仕上げられ、丸く収められている。(12-26)は口縁部の約1/2が残存していた。復原口径は10.0cm、器高は2.5cmを測る。口縁部はヨコナデによって外反気味に開き、丸底状の底部との境界はごく緩い稜線になっている。端部は丸く収められている。

いずれも口縁部の内面はヨコナデ調整の後にヘラミガキが施されているが、(12-25)は丁寧であるに対して、(12-26)は比較的雑である。底部外面の調整はいずれも指頭による押圧で、指頭圧痕がよく残っている。底部内面の暗文は平行線暗文である。

(12-27)～(12-39)は土師皿である。これらの土師皿は口径が16.0cm前後の大形土師皿(12-27・28)と、口径が10.0cm以下の小形土師皿(12-29～39)に大別される。

大形土師皿(12-27)は口縁部の一部を欠くがほぼ完形である。口径16.1cm、器高2.8cmを測る。(12-28)は、口縁部の約1/3が残存していた。復原口径15.6cm、器高3.2cmを測る。いずれも、口縁部が外傾状の直線的な立ち上がりをもつ土師皿Cに分類されるものである。

小形土師皿の残存状態および法量は以下のとおりである。(12-29)は口縁部の約1/4が残存していた。復原口径は10.4cm、器高1.3cmを測る。(12-30)は口縁部の約1/5が残存していた。復原口径は9.6cm、器高1.8cmを測る。(12-31)は口縁部の約4/5が残存していた。復原口径は10.0cm、器高1.7cmを測る。(12-32)は口縁部の約1/3が残存していた。復原口径は9.4cm、器高1.5cmを測る。(12-33)は口縁部の約1/3が残存していた。復原口径は10.2cm、器高1.7cmを測る。(12-34)は口縁部の約1/2が残存していた。復原口径は10.2cm、器高1.6cmを測る。(12-35)は口縁部の約3/4が残存していた。復原口径は9.9cm、器高1.5cmを測る。(12-36)は口縁部の約2/3が残存していた。復原口径は10.6cm、器高1.7cmを測る。(12-37)は口縁部の約1/3が残存していた。復原口径は9.6cm、器高1.5cmを測

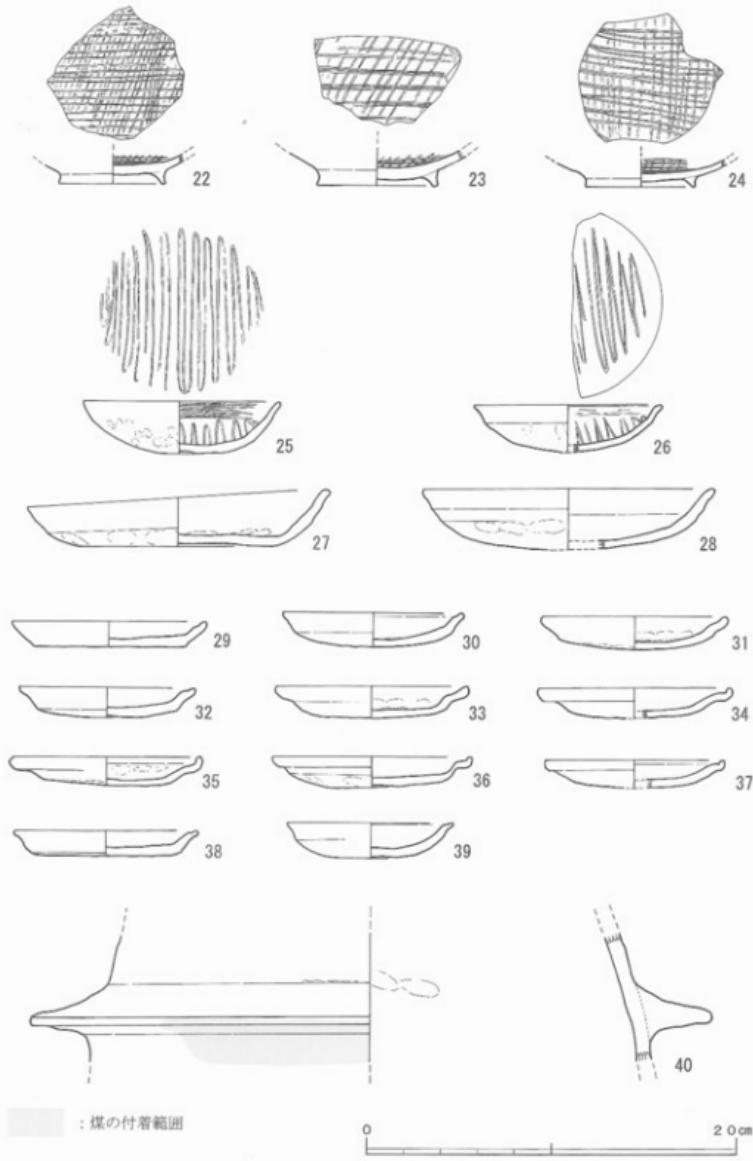


図12 土坑1 出土遺物3 (S.=1/3)

る。（12-38）は口縁部のごく一部を欠損するがほぼ完形である。口径は9.9cm、器高1.5cmを測る。（12-39）は口縁部のごく一部を欠損するがほぼ完形である。口径は10.3cm、器高2.8cmを測る。

小形土師皿は、（12-29）や（12-39）はやや形態が異なるが、多くは口縁部に水平面を形成したいわゆる「て」字状口縁の皿（土師皿A）である。口縁端部は上方へ屈曲させて跳ね上げ状に形成した皿口縁Iの形態が顕著に現れる（12-34・35・36・37）があり、（12-30・31・32・33・38）についても端部の跳ね上げがさほど明確ではないが、やはり一層水平面を形成した後にヨコナデによって端部が上方にやや屈曲している。（12-29）は口縁部と底部の境界に稜が形成されている点で他の土師皿と異なっているが、口縁部に関しては、これらの端部が上方にやや屈曲するものと同様である。（12-39）は全体的な形態の特徴が他の土師皿とは異なっている。すなわち、口径の割に器高がやや高く、底部の形態も丸底に近い。口縁部は、水平面を形成するが、端部を跳ね上げる意識はなく、口縁端部は薄くやや尖り気味に仕上げられている。

（12-40）は土釜の鋸部である。鋸部全体の1/5程度が残存していた。復原される鋸部最大径は36.4cmである。鋸部の幅は4.2cmを測り、最大径の割に幅広のものになっている。鋸部の端部は丸く収めている。鋸部の下面には煤が付着して残存している。

さて、以上の遺物は縄的にはどのような位置づけができるだろうか。

瓦器碗は、それぞれの形態や調整技法の特徴に微妙な差異があるが、総じて口径が15.0cm前後から16.0cm前後の法量であり、内外面のヘラミガキは、内面は比較的密に行われているが、外面のミガキは透き間が目立っている。また、口縁端部の形態は楕口縁Cが主体を占め、楕口縁D・楕口縁Eもわずかに見られる。高台の断面形態は高台Aや高台Cもわずかにあるが外溝状に開いた高台Bが主体である。

瓦器碗のこのような諸特徴を、十六面・薬王寺遺跡（松本編1988）で検出された一括資料と比較してみると、12世紀初頭期とされる井戸-03青色粘土層出土資料に似ると思われる。ただ、同層出土資料においては、底部内面（見込み）の暗文は平行線暗文と連結輪状暗文が共伴している点で、中西遺跡土坑1出土資料とは異なっている。もっとも、連結輪状暗文に関しては、十六面・薬王寺遺跡の縄年では、従前の理解よりも早い段階に出現することが示されているので、その存否は必ずしも時期差を反映するものではないかもしれない。

一方、土坑1の出土遺物には、一定程度以上の個体数があったものとして瓦器碗以外に土師器皿がある。このうち、小形土師皿に関しては形態が特徴的で、いわゆる「て」字状口縁の土師皿が基本的な構成になっている。

松本洋明氏によれば、「て」字状口縁の土師皿Aは、十六面・薬王寺遺跡の井戸-03青粘土にはなくなってしまっており、この形態の土師皿が見られる最終段階は、11世紀後葉に位置づけられている井戸-39上層期であるとされている。また、主として大和北部の中近世土器を検討した森下恵介・

立石堅志氏によれば、12世紀前葉を含む奈良II-B期にこの種の小皿が増加するが、次の奈良II-C期には見られないとされる（森下・立石1987）。

土坑1の出土遺物のうち、瓦器椀と小形土師皿のそれぞれの編年的な位置を、上のように理解するならば、総体としての土坑1出土遺物の時期は、11世紀後葉から12世紀前葉の範囲で考えることが可能であろう。

土坑1は、遺構の項で述べたように、粘土を主体にする埋土の状態から、一気に埋没したのではなく、泥土を溜めつつ比較的長い期間、壅んだ状態になっていたと考えられる。しかし、長い期間といつても、瓦器椀や土師皿の型式が、上に見たように底部内面（見込み）に格子状暗文がある底部の破片などを除けば比較的齊一性が高いことから、極端に長い期間を想定することはできない。土坑1出土資料は、考古学上の比較的良好な一括資料の範疇に入ると理解できる。ただ、今次調査地において、これ以外に出土遺物があった遺構が検出されず、また南葛城地域全体においても当該期の土器編年の実態がなお不分明な現状からは、上記のように、今はやや年代幅を持たして当該資料を位置づけておかざるを得ない。

また、土坑1出土資料は、瓦器椀の、特に外面のヘラミガキ調整が雑になり、口縁端部や高台の断面形態に退化現象が見られ始める段階のものと、「て」字状口縁をもつ小形土師皿が共存する確実な出土例とも言える。この点では、十六面・薬王寺遺跡とはやや状況が異なっていると思われる。今後の調査例の増加によっては、土坑1出土資料は、一つの様式として編年上に相対的位置づけが可能になることが期待される。

②1区包含層出土遺物（図13）

図13に（13-41）として1個体の瓦器椀を図示した。（13-41）は口縁部の1/4が残存した。復原口径は12.5cm、器高は5.0cmを測る。口縁部の形態は、口縁端部に沈線を施す椀口縁Dである。高台の断面形は低い逆三角形の高台Dで、底部は、底部が床面に接する椀底部Bになっている。内外面のヘラミガキは、内面は透き間が目立ち、外面は数条が施されているに過ぎない。外面には指頭圧痕が明瞭に残っている。底部内面の暗文は同心円状暗文である。

このような形態上の特徴は、上記の土坑1出土の瓦器椀より後出するものである。12世紀後葉以降に見られる瓦器椀の様相を呈する。

③2区包含層出土遺物（図13）

（13-42）は瓦器椀である。口縁部の約1/2が残存した。全体に炭素の吸着があまり良くなく、色調は外面が濃灰色、内面は残存部の約1/2が白灰色を呈している。復原口径は14.8cm、器高4.7cmを測る。口縁部の形態は、口縁端部に沈線を施し端部を意識的に外反状に仕上げた椀口縁Eである。高台の断面形は低い逆三角形の高台Dで、底部は床面には接しないが、高さ1mm程度の空間しかなく、椀底部Bに近い。内外面のヘラミガキは、内面は透き間がかなり目立ち、外面はほとんど施されていない。外面の指頭圧痕も明瞭に観察される。底部内面の暗文は同心円状暗文である。

(13-43) は弥生土器長頸壺の口頭部である。口縁部では約1/6、頭部下端付近で約1/2が残存した。復原口径12.8cm、残存高14.1cmを測る。色調は内外面とも淡赤褐色を呈するが、断面は中央付近が濃灰色になっており、焼成温度があまり高くなかったことを示している。胎土に石英・長石・金雲母・チャートの細粒を含み、径5mm程度の花崗岩礫もある。

頭部はわずかに開きながら外上方にのび、口縁部はさらにわずかに外反して開いている。端部は丸く収めている。外面は、綫方向のヘラミガキが密に施されて調整されているが、内面は、指頭による押圧かナデによる調整で、雑な感じを受ける。このため2~3cmの間隔で成形時の粘土帯の接合痕跡が観察できる状態になっている。外面の装飾として、頭部下端から綫方向に列をなして径7mm程の竹管文が施されている。ただし、竹管文のある部分が多く欠損部分に相当するために、元はどのような文様の構成になっていたか正確にはわからない。最下端のもので、少なくとも2列あったことが判り、一列は少なくとも6個の竹管文が連続して配列されている様子が判る。提示した図面では、2列の竹管文が口縁部付近まで施されたものと想定して図化した。

(13-44) は土師器壺である。口縁部の1/5が残存した。復原口径は16.8cm、残存高9.0cmを測る。胎土は精良であるが、内面に石英・長石・金雲母の細粒が目立つ。色調は淡褐色を呈す。体部の残存部分には黒斑がある。

口縁部は体部から大きく屈曲してほぼ直線的に開いている。口縁形態は、口唇部を内傾させて肥厚させたg手法で、内外に肥厚させて丸くおさめるg1手法に当たる。体部内面は指頭による押圧の後のヘラケズリによって器壁が薄く仕上げられている。外面はハケメ調整される。

(13-45) は土師器高杯である。脚部がほぼ完存し、杯部は全体の1/3が残存した。杯部口縁部の復原口径14.3cm、据部径10.5cm、器高11.6cmを測る。色調は内外面、断面とも赤褐色を呈し、胎土は長石・石英の細粒を多く含み、長石が目立っている。焼成状態がやや軟質で表面は摩滅した部分が多く外面調整について観察不能な箇所も少なくない。

杯底部と口縁部の境界は緩やかな屈曲になって稜をなしていない。口縁部はほぼ直線的に外上方に開き、端部は丸く収めている。杯部外面の調整は上記の理由でよく判らない。内面は横方向のヘラミガキによって仕上げられている。

脚部の形態は、柱状部は直線的に外下方に広がるが、柱状部の下半部でごくわずかに膨らみを持っている。据部は大きく広がっているが、柱状部との境界は比較的緩やかな屈曲で稜を形成していない。据端部は丸く収めている。柱状部の外面は上から下方向に行われたヘラケズリによって形成されている。その後の調整は横方向のヘラミガキによるらしいが、器表が荒れており定かではない。据部外面には横方向のヘラミガキが比較的よく残っている。柱状部内面は、ヘラ状工具を差し込んで横方向に回転させることで器壁を削り取っている。シボリ痕跡を消そうとしたものであるが、これがわずかに残っている。据部の内面は横方向のナデによる調整である。なお、脚部と杯部の接合は挿入法とみられる。

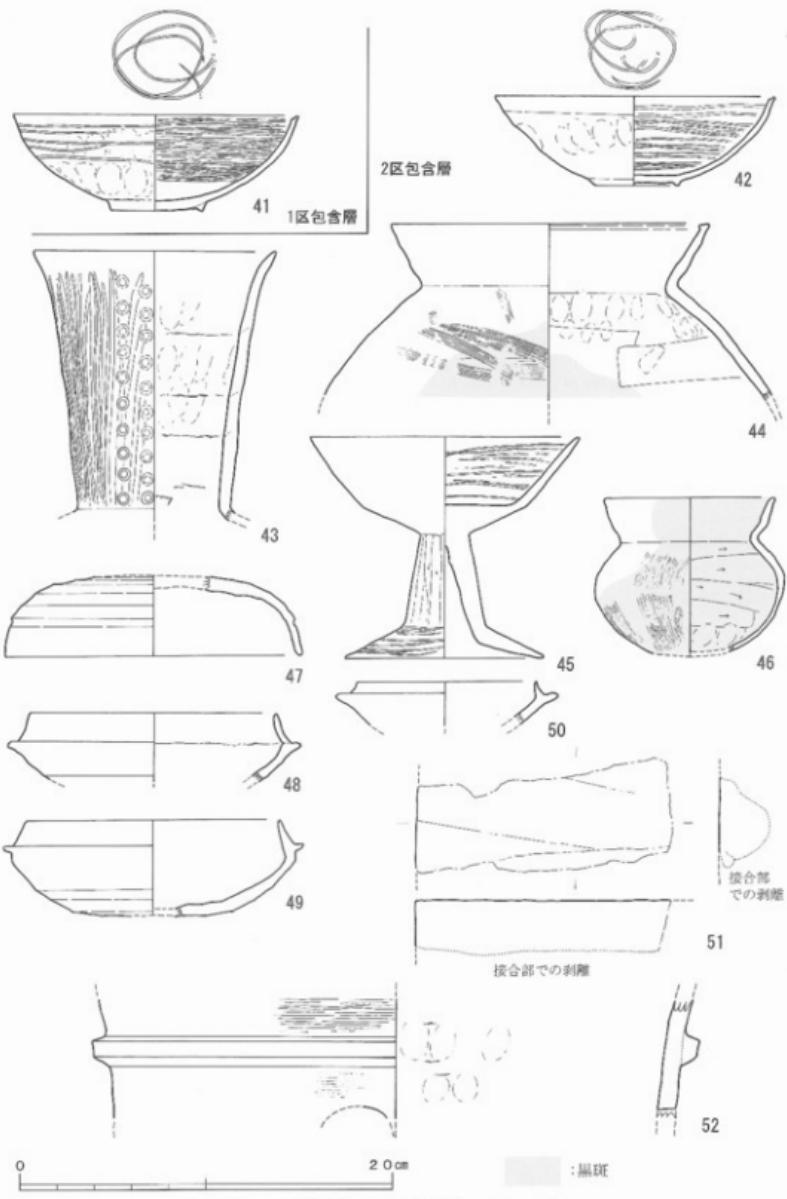


図13 1区・2区包含層 出土遺物 (S.=1/3)

(13-46) は土師器小形丸底壺である。口縁部は3/4以上が残存し、体部も全体の1/2程度が残っている。口径9.0cm、体部最大径10.0cm、復原高8.3cmを測る。色調は全体に暗灰褐色で、内面は黒斑状に黒い。胎土は精良で、長石・石英の細粒が観察できる。

形態は、やや扁球形の体部に器高の1/4程度の高さの口縁部を持つもので、体部最大径が口径を凌ぐD形式に当たる。口縁部は、下半部で屈曲して傾斜角度を内側に変えているが内湾する程ではなく、上半はほぼ直線的に開いている。口縁端部は、ヨコナデによって外側に丸くわずかに肥厚している。口縁部の内外面はヨコナデによって仕上げられている。体部の外面はハケのちナデによる調整が行われ、内面はヘラケズリによって器壁が薄く搔き取られているが、底部の内面には指頭圧痕が残っている。

(12-47) は須恵器杯蓋である。口縁部の約1/4が残存した。復原口径は15.6cm、器高4.2cmを測る。焼成はあまり良くなく、色調が内外面ともくすんだ濃灰色を呈する。断面の色調が均一ではなく、内面寄りの半分が赤褐色になっている。焼成時において、少なくともこの土器周囲では温度が十分に上がらなかったことを示している。胎土は精良で、長石・石英・チャートの細粒を若干含んでいる。

天井部外面はヘラケズリが行われている。ヘラケズリの範囲は比較的広い。このヘラケズリの際の砂粒の動きから、ロクロ回転方向は右回りであることが判る。天井部と口縁部の境界は浅い凹線になって、口縁部は下方に直線的にのびて端部は丸く収めている。口縁部の内外面および天井部の内面の調整はヨコナデによる。

(13-48・49・50) は須恵器杯身である。

(13-48) は口縁部の1/9程の小破片を回転復原によって図化した。復原口径13.0cm、残存高3.6cmを測る。焼成は良好、堅緻で、色調は淡青灰色を呈する。

底部はごくわずかしか残っていないが、残存部分から底部の約1/2にヘラケズリが行われたことが推測される。このときの砂粒の動きからロクロ回転方向は右回りであることが判る。受け部はほぼ水平に広がり先端はやや尖り気味になっている。たちあがりはやや内側に傾斜したのち、下半で屈曲して上方にのびる。口縁端部は丸く収めている。受け部やたちあがりの周囲はヨコナデ調整されるが、たちあがりの内面にはその下端に接合痕跡が残っている。

(13-49) は全体の約1/4が残存した。復原口径13.4cm、器高5cmを測る。焼成は良好で、色調は淡青灰色を呈する。胎土は精良であるが、長石・石英の細粒がやや目立つ。

全体の形状は、口径の割に受け部が小さいことや、たちあがりが太く短いことからアンバランスな感じを受ける。器高もやや高い。

底部の外面に施されたヘラケズリは1/2弱に及ぶようであるが、調整はむしろ雑な印象を受ける。底部には、径1cmほどの粘土粒も付着している。受け部はほぼ水平に広がっているが、通有のものよりやや短い。端部は丸く収めている。たちあがりは内傾して上方にのびている。口縁端部は丸く

収めている。たちあがりおよび底部の内面はヨコナデ調整されている。

(13-50) は残存1/7以下の小破片から回転復原によって図化した。復原口径は9.4cmを測る。焼成はややあまく、色調は白灰色を呈する。胎土はやや粗い。1mm以下の大長石をかなり含み、チャートをわずかに含んでいる。形状は、やや外上方に開く受け部に、短いたちあがりがついている。受け部先端や口縁端部は丸く收めている。

(13-51) は、全体の形状が不明である。形象埴輪の破片であろうか。図示状態の上面と左側面が端部面を成してゐる。図示状態の下面は、横断面の形状が三角形ないしは蕭鉢形を呈しており、元は粘土の接合部分に当たるがそれが剥離した部分である。破断面となつてない上面および左側面は平滑に調整され、上面にはヘラ状工具で削られた痕跡も残っている。

(13-52) は円筒埴輪片である。最大復原径は32.2cm、残存高は6.3cmを測る。色調は内外面とも赤褐色を呈する。胎土はやや粗く0.5mm程度の石英・長石・チャート・赤色粒などが目立つ。タガの断面形は台形を呈し、上面がヨコナデによってわずかに窪んでいる。図示状態の下端に円形スカシが見えている。外面の調整はヨコハケによつているが、残存部分が小さいせいもあるのか静止痕などは認められない。内面は指頭圧痕がよく残っている。

さて、以上のように2区の包含層出土遺物は、年代幅が大きく各時代のものが混在している。

(13-42) は、1区包含層の(13-41)と同様に、土坑1出土瓦器碗より後出の要素を持つてゐる。12世紀後葉から13世紀頃のものと考えられる。

(13-43) は弥生時代後期の長頸壺であろう。古式土器師である(13-44・45・46)もそれぞれに微妙に時期が異なっている。甕(13-44)は布留2式に当たるが、高杯(44-45)はさらに古い要素を残しており、小形丸底壺(13-46)は逆にやや新しく布留3式に相当しよう。

須恵器の(13-47・48・49・50)のうち、杯蓋(13-47)・杯身(13-48)はTK10型式に、杯身(13-50)はTK217型式に比定されよう。通常の杯身とはやや形態が異なる(13-49)は位置づけが難しいが、口径・端部の形状・全体的な調整のあり方などからはやはりTK10型式に併行するとみられる。

埴輪に関しては、形象埴輪とみられる(13-51)は時期不詳であるが、円筒埴輪(13-52)は川西編年Ⅲ期併行であろう。この時期は調査地の南西250mの至近距離にある室宮山古墳の築造期と合致する。包含層に含まれていた埴輪は、元は室宮山古墳に由来する可能性が高いと考えられる。

④3区包含層出土遺物(図14)

(14-53) は弥生土器器台である。全体の約1/3が残存した。色調は内外面とも赤褐色を呈する。胎土はやや粗く、0.5mm以下の長石をかなり含む。そのほか1mm大の石英が目立つほか、5mm大の花崗岩礫も含んでいる。

胴部から受け部、裾部が緩やかに外反する形態である。付加的に貼り付けられた口縁部は、外下方に大きく屈曲して垂下している。裾部先端は内側に折り返してやや肥厚させて接地部が水平につ

くり出されている。胴部中程よりやや下に、逆水滴形のスカシが穿たれている。スカシは、必ずしも全体が残存したのではなく、図上で破線で補った箇所は残存部分から復原したものである。また、残存した破片の両端に残されたスカシの痕跡から考えると、このスカシは元は3方に設定されたものであることが判る。

外面の調整はナデによっている。しかし垂下した口縁部分は歪みも目立ちあまり丁寧な調整とは言えない。内面は、下半は指頭圧痕が残っているが、上半はハケにより器壁が平滑にされている。

(14-54・55・56)は土師器壺である。

(14-54)は、口縁部の約1/3が残存していた。復原口径15.8cm、残存高14.7cmを測る。体部の上半部が残っており、やや長胴の形態であることが窺える。焼成は比較的良好であるが、土器自体はあまり堅緻ではなく一部では摩滅した箇所も見られる。色調は外面が淡赤褐色、内面が暗赤褐色を呈する。胎土は比較的粗く、1mm大の石英・0.5mm大の長石が、特に内面に目立つ。

口縁部は体部から屈曲して外上方に開き、口縁端部はヨコナデにより内上方に屈曲している。先端部は丸くまとめられている。外面の調整は縱方向のハケ、内面はヘラケズリによっている。内面のヘラケズリは、肩部を除いて体部全体に及んでいるらしいが、体部の上半部は比較的器厚が厚く仕上げられている。

(14-55)は口縁部の1/5が残存した。復原口径16.0cm、残存高8.2cmを測る。焼成は良好であるが、残存部は黒斑の部分に相当するらしく、全体に暗灰褐色を呈している。1mm以下の石英・長石、0.5mm以下の金雲母などを含んでいるが、全体として胎土は精良である。また口縁部と体部の外面に煤が付着している。

外上方に開く口縁部は、その下半で緩やかに屈曲して上方に傾斜角度を変えて内湾気味になっている。口縁端部は、内傾させて肥厚したもので口縁g手法が用いられている。ただ、内面に強く内傾、肥厚するが、外面端部は丸く收められている。

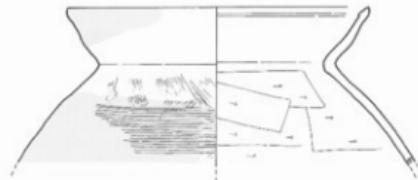
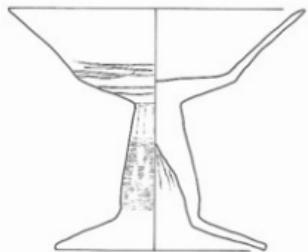
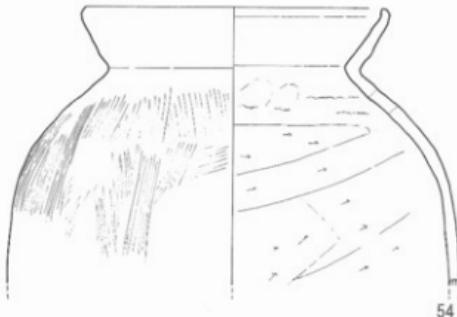
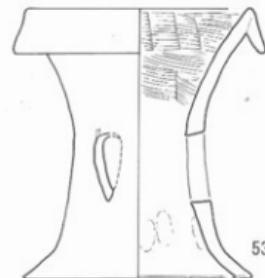
口縁部の内外面の調整はヨコナデによっている。体部の外面の調整は、縱方向のハケののち、横方向のハケが施され、比較的丁寧に器表が整えられている様子が看取できる。体部内面は、口縁部との境界付近までヘラケズリが行われ、器厚を薄く仕上げようとしている。

(14-56)は口縁部の1/8が残存した。復原口径16.2cm、残存高7.7cmを測る。焼成は良好で、色調は淡赤褐色を呈する。胎土は精良であるが、内面には、1mm大の長石・石英、0.5mm以下の金雲母が目立つ。

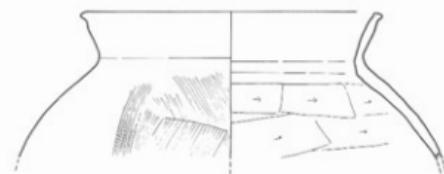
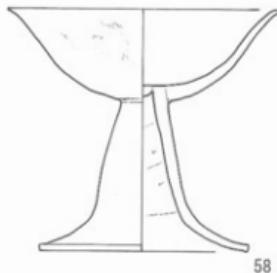
口縁部は、体部から緩やかに屈曲して外上方に直線的に開いている。口縁端部は上方に端面を持つb手法である。端部の外面は丸く肥厚している。

口縁部の内外面の調整はヨコナデによっている。体部の外面調整は、縱ないしは斜め方向のハケが施され、内面は口縁部の境界付近までヘラケズリが行われている。

(14-57・58・59)は土師器高杯である。



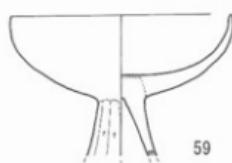
55



56



60



: 煤の付着範囲

図14 3区包含層 出土遺物 ($S.=1/3$)

(14-57) は脚据部の約1/2を欠いているが、杯部や脚柱状部はほぼ完存している。杯部の口径は15.8cm、器高12.8cmを測る。焼成は良好で、色調は全体に赤褐色を呈する。胎土も精良で、径1mm以上の砂粒はほとんど目立たない。0.5mm以下の長石・雲母を含む。

杯部の形態は、底部と口縁部の境界は比較的明瞭であるが、後を成す程ではなく緩やかな屈曲になっている。口縁部はほぼ直線的に外上方に広がっている。端部付近は、強いヨコナデによって薄く仕上げられ、ごくわずかに外反するが目立つ程でもない。縫部は丸く収められている。

脚柱状部は下半で膨らみを持っている。この柱状部から縫部は大きく広がるが、その境界は丸みを持って屈曲しており稜を成さない。縫部縫部は下方に丸く肥厚している。

内外面の調整は器表面の摩滅のために不分明な点も多い。杯部外面は底部・口縁部とも横方向のヘラミガキが施されている。しかしその間隔は粗く、また形成時に生じた粘土の小さな皺が目立ち、外面調整は雑な印象を受ける。脚柱状部外面は、縱方向のヘラケズリのち横方向のヘラミガキが行われている。この部分のヘラミガキは杯部に比べると密である。縫部の外面および柱状部内面の下半はヨコナデが施されるが、柱状部内面の上半はそれが及んでおらず、縦方向に走るシボリ痕が観察される。

(14-58) は口縁部は約1/9が、縫部は約1/2が残存した。口縁部の復原口径は14.6cm、器高12.8cmを測る。焼成は比較的良好であるが、特に杯部の器表面の摩滅が進んでおり、器壁の荒れたところでは砂粒も目立つ。径1mm以下の石英・長石を含むほか、同程度大のチャートも若干含んでいる。土器の色調は外面は赤褐色を呈し、断面は濃灰色をしている。

杯部の形態は、底部と口縁部の境界が不明瞭な程に緩やかに屈曲して、口縁部は外上方に開いている。口縁縫部付近はやや強いヨコナデが加えられて、外反してさらに開いている。縫部は丸く収められる。脚柱状部は下方に広がりつつ下り、下半にわずかに膨らみを持っている。縫部は大きくラッパ状に開いているが、柱状部との境界は緩やかに屈曲して全く明瞭ではない。縫縫部は外側に面を成す。

外面調整は最終的にヨコナデによっているが、杯部外面には成形時の縦方向のハケメが辛うじて観察できる。脚柱状部内面は横方向のヘラケズリが行われ、器壁が平滑に仕上げられている。また、杯部と脚部の接合に関しては、脚柱状部の上端に開いた穴を粘土で充填しつつ、外面に杯底部となる粘土を接合して、杯部を形成していく手法である。

(14-59) は口縁部のごくわずかのほか、脚部の上端部が残存した。口径の復原は、脚部の中軸で反転することにより得た。復原口径11.6cm、残存高7.6cmを測る。焼成は不良で、全体に器表の風化が進行して柔らかい。色調は内外面とも赤褐色を呈し、断面は中央付近が濃灰色である。胎土は精良であまり砂粒が目立たない。0.5mm以下の長石・石英をわずかに含んでいる。

杯部の形態は、浅い輪状をしている。口縁縫部は丸く収めている。脚部は下方に向けて広がっているが、その形態は全く判らない。脚部の外面は縦方向のヘラケズリにより形成されている。

杯部と脚部の接合は、上記の（14-58）と同様の方法によるらしいが、脚柱状部の上端の穴は脚部を形成するときに塞がれていたらしい。

（14-60）は、須恵器杯蓋である。口縁部の1/4強が残存した。復原口径13.0cm、残存高4.3cmを測る。焼成は良好で堅緻。胎土は精良であるが、1mm大の石英を含んでおり、散見される状態である。色調は、内外面とも濃青灰色を呈し、断面の一部には暗赤紫色の部分が見える。

口縁部は下方にはほぼ直線的にのび、端部は水平な面を成す。口縁部と天井部の境界となる稜は、外方に突出している。天井部の形状は定かではないが、わずかに丸みを持って膨らんだ形態とみられる。ヘラケズリが天井部の2/3以上に及んでいる。

以上、3区包含層出土遺物についても、相当な時期幅があることが判る。

器台（14-53）は、外面に加飾がないことから弥生時代後期に属するであろう。古式土師器は個別の個体を取り上げて各時期に比定することは難しいが、壺（14-55）・高杯（14-57）・（14-58）は布留3式に併行するとみられ、壺（14-54）などは、体部の形状からそれよりも後出するものと思われる。また、須恵器杯蓋（14-60）はその形態からTK23型式に比定できよう。

4.まとめ

各調査区で、現耕土・床土の下に、比較的濃厚な遺物包含層を確認した。この包含層からは主に古墳時代中期前半の遺物が出土するが、弥生土器や須恵器、平安時代の遺物も散見される。

遺構は1区および2区で検出した。土坑1基および溝5条である。

土坑1は、瓦器や土師器など比較的多くの出土遺物があった。それらの年代観から土坑1の形成年代は11世紀後葉から12世紀前葉頃とみられる。溝からは出土遺物がなかったので形成時期を考えるには根拠を欠くが、層位的にみて、土坑1とはほぼ同時期とすれば、当該期においては今次調査地周辺は、集落のなかでも居住域ではなく畑地などの生産域に相当していた可能性が考えられる。

ところで、これらの遺構は、上記の遺物包含層を除去した下層で検出したものである。4区や5区の調査結果などからみると、これらの遺構の基盤層自体が、あまり濃厚ではない遺物包含層で、地山はこのさらに下層に存在している。なお、地山面を検出した地点においては、いずれも遺構は認められなかった。

以上の状況から、3層として認められた遺物包含層は、少なくとも平安時代以降に堆積したことが判る。周辺地は中西遺跡として周知されており、かつての調査では古墳時代中期の住居跡なども検出されているが、今次調査地で検出された遺物包含層は、そのような周辺地から流入したものと理解される。

なお、以上の知見を得て現地調査を終えたが、今次調査では建物建築後の影響を考えて、多くの地点で地山面を検出していない。将来においてさらに掘削深度の深い工事が計画された場合には、再度発掘調査が必要であることをここに付言しておく。

（参考文献）

- 秋山日出雄・柄干善教 1959 「室大墓」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 18 冊）
- 小栗明彦 2002 「御所市 中西道跡 第 4 次発掘調査報告書」『奈良県道路調査概報 2001 年度』
2003 「御所市 中西道跡第 5 次調査」『奈良県道路調査概報 2002 年度』
- 川西宏幸 1978 『円筒埴輪総論』『考古学雑誌』第 64 卷第 2 号
- 木許 守 1990 「中西道跡－第 2 次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第 9 集）
1991 「中西道跡－第 3 次発掘調査報告－」（『御所市文化財調査報告書』第 10 集）
1995 「名柄遺跡第 4 次発掘調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第 19 集）
- 木許 守福 1996 「宮古山古墳群四輪記調査報告」（『御所市文化財調査報告書』第 20 集）
- 佐原 真 1968 「近畿地方」『承生土器集成』本編 2
- 関川尚功 1989 「御所市 宮大墓古墳外堤部 発掘調査報告」『奈良県道路調査概報 1988 年度』第 2 分冊
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群 I」（『研究論集』第 10 号）
- 寺沢 黒 1986 「國內古式土師器の癡年と二、三の問題」「矢部遺跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊）
- 寺沢 黒編 1986 「矢部遺跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 49 冊）
- 坂 清福 1996 「南郷遺跡群 I」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 69 冊）
- 藤田和尊 1991 「奈良県御所市名柄遺跡の調査」『日本考古学年報』42
1994 「猪原遺跡 I」（『御所市文化財調査報告書』第 17 集）
- 藤田和尊・木許 守 2001 「鶴鶴波 1 号墳 調査概報」（学生社刊）
- 松本洋明編 1988 「十六面・薬王寺遺跡」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第 54 冊）
- 森下恵介・立石堅志 1987 「大和北部における中近世土器の様相—奈良市内出土資料を中心として—」『奈良市埋蔵文化財調査センター記要 1986』

図 版



1区全景（北から）



1区全景（南から）

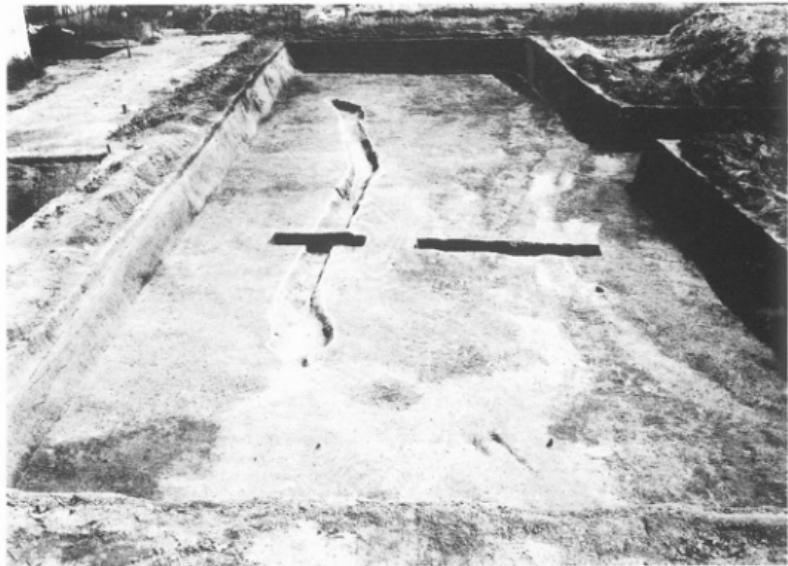
図版2



1区 土坑1 検出状況



1区の溝（東から）



2区 溝5（西から）



調査地（2区）から水越峠を望む

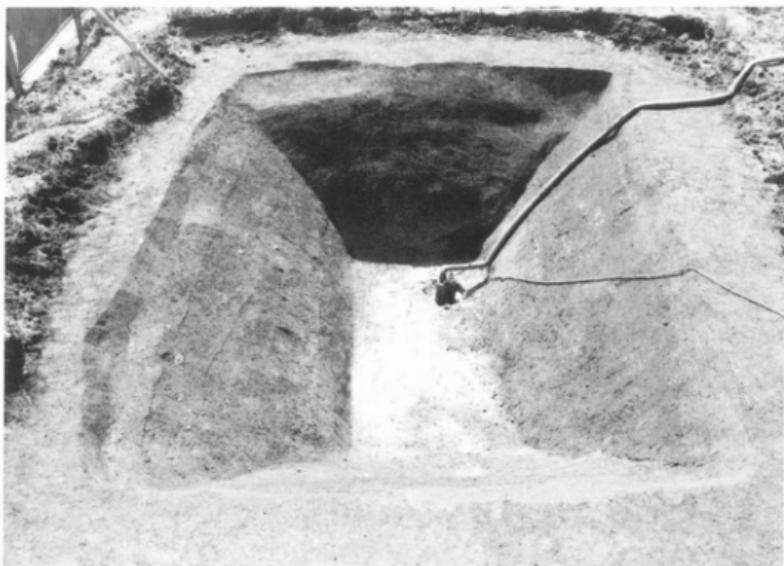
図版
4



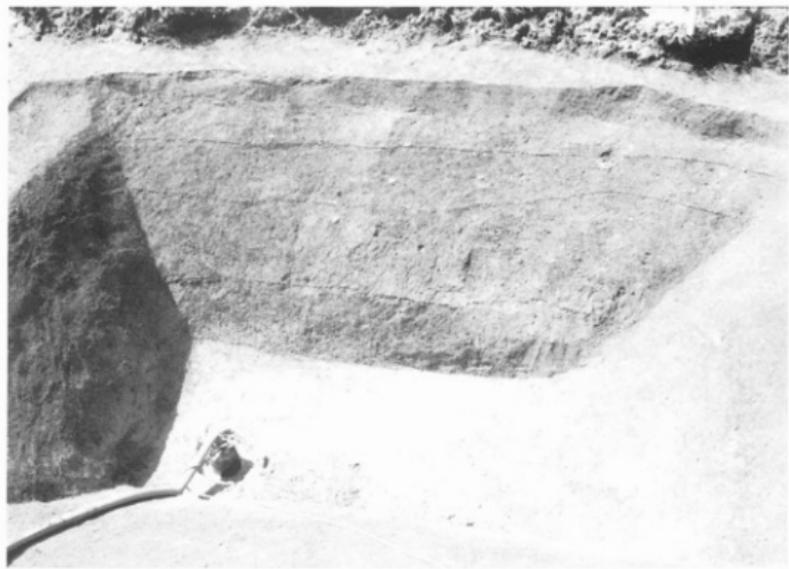
3 W区全景（北から）



3 E区全景（北から）



4区 全景（西から）



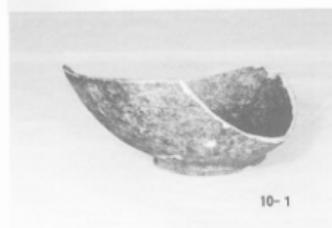
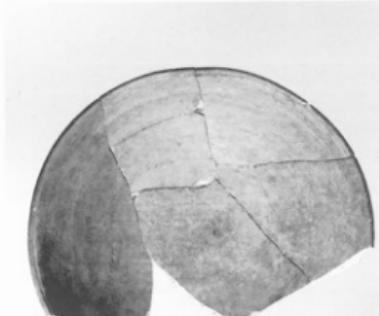
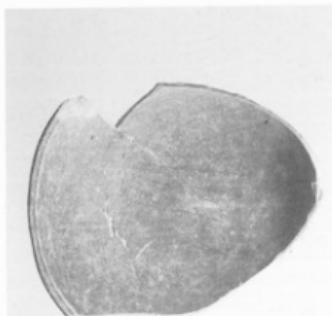
4区 南壁断面



5区全景（西から）



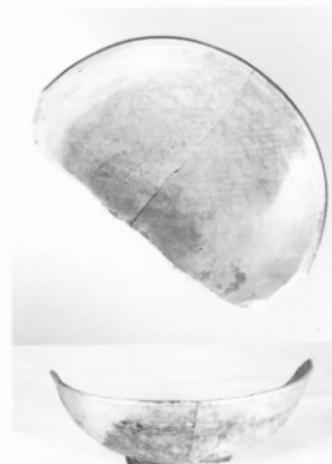
調査区（2区）と室宮山古墳・ネコ塚古墳



10-1



10-2



10-3

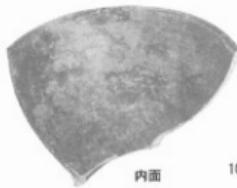


10-4

出土遺物 1 (S. ≒1/3)

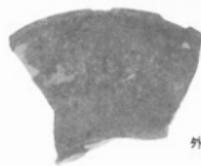


外面

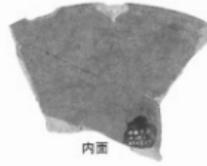


内面

10-5



外面

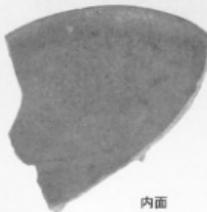


内面

10-6

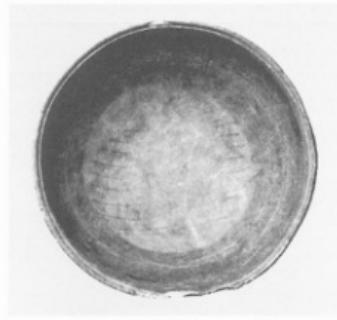


外面



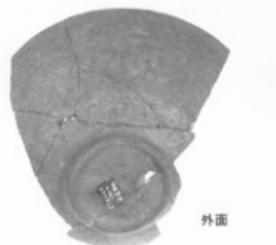
内面

10-7

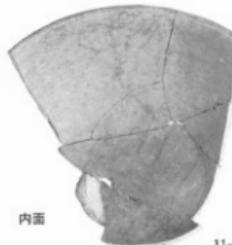


10-8

出土遺物 2 (S. 与1/3)



外面

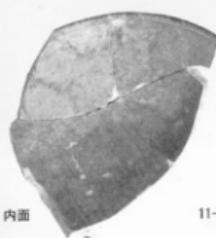


内面

11-9

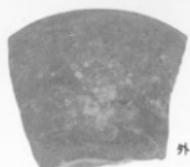


外面

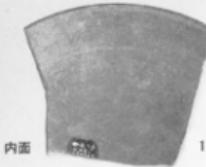


内面

11-10



外面



内面

11-11

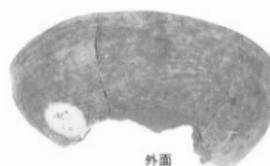


外面

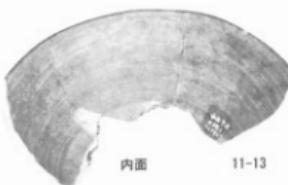


内面

11-12



外面

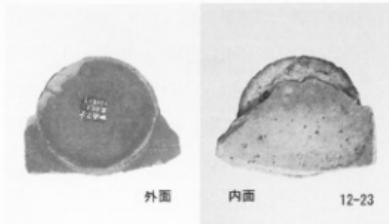
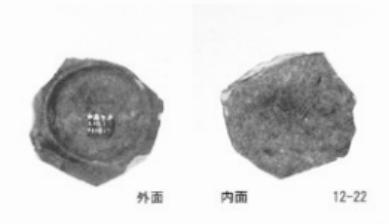
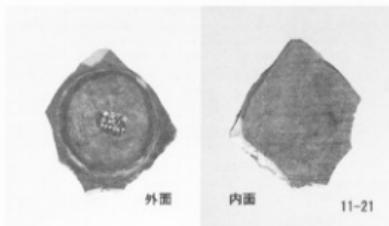
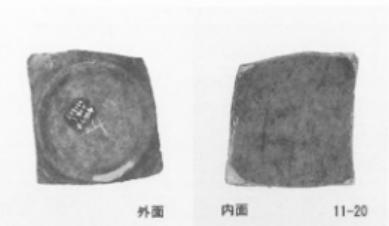
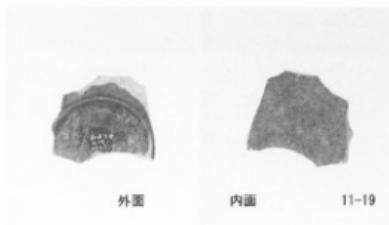
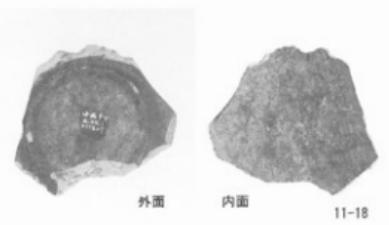
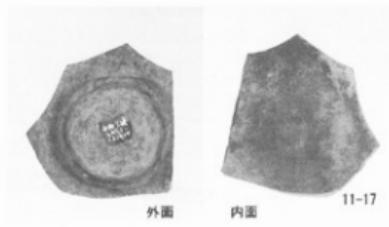
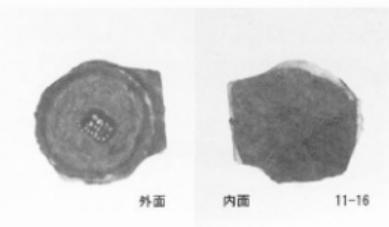
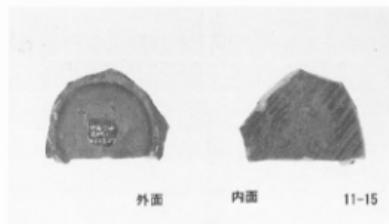
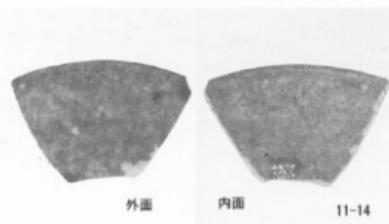


内面

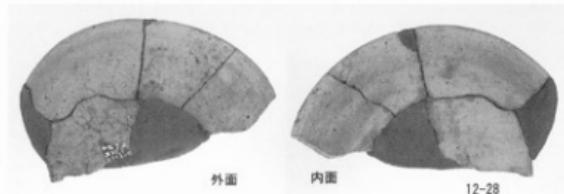
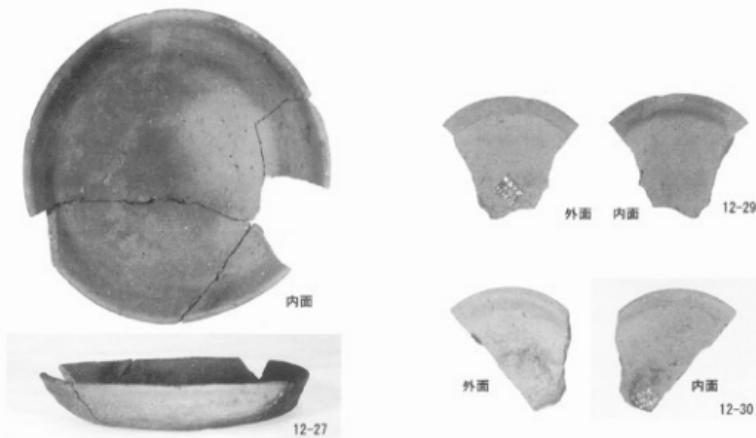
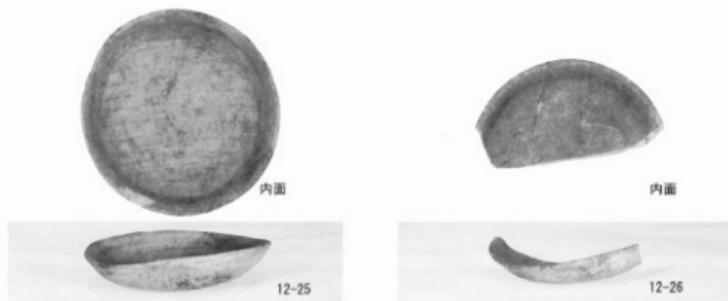
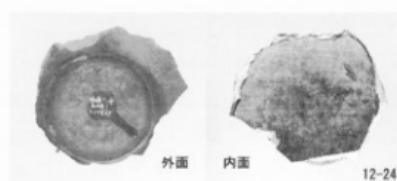
11-13

出土遺物 3 (S. ≈ 1/3)

図版 10



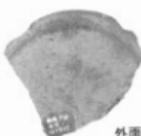
出土遺物 4 (S. 1/3)



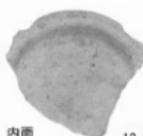
出土遺物 5 (S. 1/3)



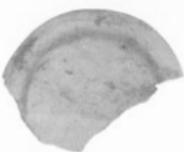
12-31



外面 内面



12-32



12-33



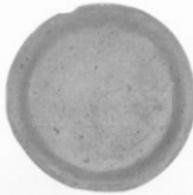
12-34



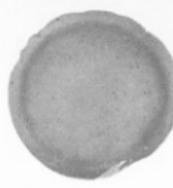
12-35



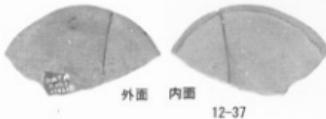
12-36



12-38

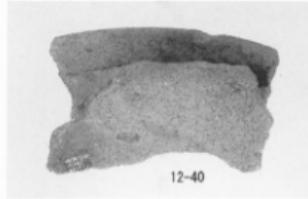


12-39



外面 内面

12-37



12-40

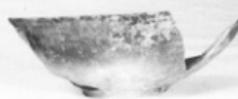
出土遺物 6 (S. ≈ 1/3)



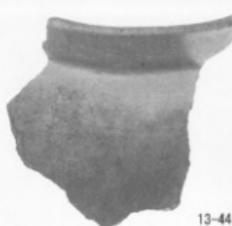
13-41



13-42



13-43



13-44



13-45



13-46



13-47



13-48



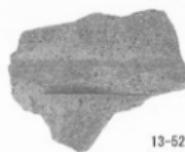
13-49



13-50



13-51



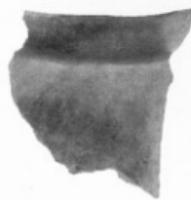
13-52



14-53



14-54



14-55



14-56



14-57



14-58



14-59



14-60

出土遺物 8 (S. ≈ 1/3)

報告書抄録

ふりがな	なかにし いせき							
書名	中西遺跡							
副書名	第7次発掘調査報告							
卷次								
シリーズ名	御所市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第29集							
編著者名	木許守							
編集機関	御所市教育委員会							
所在地	〒639-2298 奈良県御所市1-3 TEL 0745-62-3001							
発行年月日	西暦 2005年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 °'."	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
なかにし 中西遺跡	奈良県御所市 だいしむら 大字室	29208		34度 26分 43秒	135度 44分 8秒	20030804～ 20030905	600	開発行為 に伴う事 前発掘調 査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
中西遺跡	集落	平安時代	土坑・溝		瓦器・土師器・須 恵器・弥生土器・ 埴輪	遺物包含層は、古墳 時代前半期が主体に なる。		

奈良県御所市
中西遺跡
—第7次発掘調査報告書—

御所市文化財調査報告書 第29集

平成17年（2005年）1月31日

編集・発行 御所市教育委員会
御所市1-3
印刷機 笠田印刷所
御所市今住16-3